

「タマムシの美」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

小学校低学年の頃…つまり約半世紀前…私は男子のほとんど全員がそうだったように「昆虫少年」だった。自宅は八王子市郊外の多摩丘陵の住宅地だったので、少し坂を登れば、カブトムシのいる雑木林はいくらでもあった。夏の夕方に「仕掛け」をして、早朝にそこに集まる甲虫類を採るのが、夏休みの日課だったような気がする。



先日、約半世紀ぶりに「生きたタマムシ」と再会することができた。3年生の女の子が学校に持ってきてくれたのだ。私は50年前と同じ歓声をあげた。



当時は、駄菓子屋さん(正確には駄玩具屋さん)に「昆虫採集セット」なるものを売っていて、小学生の小遣いでも簡単に買えた。怪しげな薬品(たぶん殺虫液と防腐液)に、プラスチックの虫メガネ、毒ビン、展翅針、メス(何に使うのか不明)、標本用ラベル、それに針のついた注射器まで入っていた。こんな「危険なもの」が何の規制も受けずに店頭並び、当時の小学生は自由に購入できたのである。他にも、運動会のスタート銃に使うような火薬類、地面に投げるとすごい音のするクラッカーなどの「危険物」も何度も買った記憶がある。

昆虫少年にとって「あこがれの虫」は「タマムシ」だった。保育者の「こんちゅうずかん」に載っていた「タマムシ」の画を見て、「ほんとうにこんなにきれいな虫が、この世にいるのかな?」とずっと思っていた。私のフィールドでは一度も見かけず、長瀬の河原の樹木でやっと出会うことができた。生きたタマムシを見たのは、唯一その時だけだった。



翅だけでなく、頭部も脚の先端まで、金属光沢のある虹色に輝いている。本当に美しい。



持ってきてくれた子に、腹側も見せてもらった。翅側と同じように美しい金属光沢を持っていて美しい。

益富寿之介は著書の中で、鉱物結晶の美を評して「自然は何故、このような美しい造形を創り出すのだろうか」と述べている。自然の創り出す形態には、例外なく理由がある。しかし、タマムシの美の理由はわからない。「ヒトが美しいと思うため」としか思えない。